居場所のはたらき

居場所にはふたつのはたらきがある。そのひとつは、ありのままの自分を丸ごと受け入れてくれる人間関係や空間というはたらきである。

子どもに対する大人の関心が奇妙に過剰なものになったせいか、子どもは、学校でも、家庭でも、周囲の大人が期待する役割を演じるように求められている。彼らの巧みな演技力には驚嘆するが、見方を変えれば、それだけ屈折しているのだ。そんななかで、子どもはとても息苦しい気持ちになっているようだ。自分を見失っているともいえるだろう。そのせいで、ありのままの自分を丸ごと受け入れてくれると感じるところが必要とされているわけだ。

そういうところを、早い時期から切実に求めてきたのは、不登校の子どもたちだった。そのために、居場所ということばは、まず最初に彼らを支援する活動のなかで使われたという経緯がある。その後の居場所づくりの拡がりは、それが彼らだけの問題ではなかったということを示しているのだろう。

もうひとつは、子どもや若者が大人になる準備をするための人間関係や空間というはたらきである。

矛盾したことをいうようだが、ありのままの自分を丸ごと受け入れてくれるようなところが、この世の中にあるのだろうか。母親の胎内のような全能感に満たされたところは、どこにも存在しないのではないか。

人生は挫折の連続だろう。人は、周囲と衝突して折りあいをつける経験を重ねながら自分に気づいていくものだ。この点に着目して、居場所そのものから少し距離を置いたところに身を置いて考えると、居場所とは、子どもが大人になる準備をするところだといえる。これは、先に紹介した居場所の系譜を思い起こしても分かることではないか。

ただ、そうはいっても、ありのままの自分を丸ごと受け入れてくれる居場所という理解が間違っているわけではない。「自分の居場所がない」という子どもに、大人が「ここが、あなたの居場所だよ」と答えるときにはじめて、居場所のはたらきが子どもへと伝わるからだ。

このようなふたつの理解は、いずれか一方が正しいということではなく、居場所への大人の位置の取り方のちがいによるものだ。